

家庭の日作文コンクール

前号に引き続き、「家庭の日作文コンクール」
入選作品を紹介します。

優秀賞

私を支えてくれる
家族とまわりの人々



遷喬小学校6年
のび原望 里枝

「望稚ちゃん、お誕生日おめでとう。」

私は二日前（十月十日）に十二回目の誕生日をむかえたばかりです。たくさんの人に、このお祝いの言葉を言ってもらって、とてもうれしかったです。

私は、生まれた時から耳が聞こえません。だから、二才の時からお母さんと鳥取ろう学校に行つて発音や言葉の練習をしました。今、同じ遷喬小学校で学んでいる典子さんも、いっしょに訓練をうけたお友だちです。他のお友だちはほとんど言葉を覚え発音も上手になっていくのに、私はなかなかそれができな

くてくやしかったです。お友だちがうらやましかったです。お母さんはとても厳しくて、きちんと言葉が言えないと怒りました。私は悲しくて、なぜお母さんはこんなに厳しいのか、分かりませんでした。

四才になって東京に引っ越しをしました。私は、その時、どうして引っ越しをするのか分かりませんでした。まだ小さかったし、説明してもらつても意味が分からなかったのだと思います。家族の名前やあいさつの言葉しか言えなかった頃でした。

両親は、私がきちんと言葉を話すことができるようになってほしいとずっと思っていて、東京の『トライアングル』で訓練を受けることになったのです。金山先生や児玉先生、南村先生に言葉や発音を楽しく学ぶことを教えていただきました。大沼先生には耳の検査でお世話になり、私にあった補聴器を見

つけていただきました。今も、夏休みとか春休みには東京に行つて、言葉や耳の検査をしてもらつたり、電話でお話をしたりしています。

四才から七才までの四年間、東京にいたのですが、耳が聞こえないためにいろいろいじめられたこともありました。お兄さんが、いじめっ子の男の子に注意してくれたこともありました。ある時、色紙で折つたつるが、げた箱に置いてある私のくつの中に入っていたことがあります。そのつるに、ひどい言葉が書かれていたことは、今でもずっと覚えていて、つらく悲しい思い出になっています。

でも、十二才になった今の私は、身体も心も大きくなり、強くなつたと思います。耳が聞こえないけど、みんなと同じようにできることはたくさんあります。言葉を知つて、いろいろなことが分かつてきたし、英語だつて勉強しています。私が、いろいろな言葉を覚えることができたのは、手話があつたからで

す。母が手話を習い、その手話に言葉をつけていくことで、言葉が増えてきたそうです。

母は聞こえない人たちのために、手話を使って、県ろう連で仕事をしています。電話や話の内容を手話で伝えたり、文書を作つたりしています。夏休みに事務所に連れて行つてもらい、その様子を見て、大変だなあと思いました。父は、米子の大病院で働いていていつも家にはいませんが、土、日曜日は必ず家へ帰つてきてくれるので、それを楽しみにしています。父は、聞こえない人が差別をうけているいろいろなきまりを調べ、変えていく調査委員になっていきます。私は将来、かんごふになりたいと思つていますが、聞こえない人は医者やかんごふになれないというきまりがあります。それを変えようと父もがんばつてくれているんだなあと思います。

私は、差別に負けない強い心をもつた人になりたいと思っています。私を助けて支えてくれる家族やまわりの人たちがいるから、これからも負けないでがんばっていけると信じています。